O2-038

乳幼児健診において在胎週数を確認する意義 ～後期早産（Late Preterm）児の育児感継続調査より～

仁木 敦子[1]、佐藤 拓代[1]、松本 小百合[2]

[1]大阪府立母子保健総合医療センター　母子保健情報センター 母子保健調査室、
[2]東大阪市保健所

【目的】

在胎週数34週0日から36週6日までに出生した児は後期早産児（以下LP児）と定義され、少し早く生まれたことから哺乳不良や呼吸障害等を起こす割合が高くなることが明らかにされている。しかし、正期産児と比べて出生体重の差は大きくないため医療的フォローは早期に終了し、保健のサポートも低出生体重児ほどに手厚いとはいいがたい。そこにはフォロー基準が出生体重であり、早く生まれたことによる児の未熟性や育児のしにくさ、母の不安への視点が十分でないことに理由があると考える。　今回、一地域で生まれたLP児の継続調査によって見えてきたLP児の特徴と母の育児感の変化を報告し、乳幼児健診において在胎週数を確認する必要性を提案したい。

【方法】

Ｈ市の平成26年1月から平成27年3月生まれのLP児161名（出生数に対し3.8%）に対して乳児家庭全戸訪問を行った時に第1回調査票を配布した。保護者が記入後保健所に返送があったのが62件（返送率38.5%）であった。継続調査は返送された方に生後6ヶ月時に第2回調査票を送付し回答を依頼した。返送は54件（同87.1%）であった。調査内容は、妊娠出産の状況、児の様子と育児困難感、母の育児感やうつ傾向であり、継続調査も同様の質問を設定することで育児感の変化を明らかにした。

【結果】

第1回調査で明らかになったLP児の特徴として、「子育ての不安や悩み」(以下「不安」) がある割合が、「第1子」では84.9%、「第2子以上」では44.4% であり、第1子では不安や悩みを抱える母が多かった（p<.001）が、継続調査の6か月時点での「不安」はそれぞれ69.0%、50.0%があると回答し、差がなくなった（p=0.17）。　継続調査において、4か月時に「不安」であったと回答した50.0%が6か月時点も「不安」であると回答したが、4か月時に「不安」でなかったと回答した85.7%が現在は「不安」であると回答した（p=0.02）。また、「児に心配な様子」(以下「心配」) があると回答したうち85.7%が「不安」と回答し、「心配」がないが「不安」と回答した29.2%に比べて割合が高かった（p<.001）。『考察』　乳児家庭全戸訪問の頃には、第1子がLP児であることが不安を高めていること、6か月の頃には新たな児の心配な様子が生じ不安を抱えることが推察された。LP児では、発達や心配になる様子から育児不安が生じる可能性を予測し、4か月児健診においても在胎週数を保健指導に生かす必要性が示唆された。

O2-039

乳幼児の「おしゃぶり」と不正咬合

布施 理子[1]、伊藤 末志[2]、吉田 宏[1]

[1]鶴岡市立荘内病院　小児科、
[2]いとうクリニック

【背景】

近年、3歳児の指しゃぶりと不正咬合との関連性が明らかにされた。乳幼児の「おしゃぶり」も指しゃぶりと同様、精神的安定をあたえるとされている。その一方で、歯の不正咬合との関連が指摘されており、指しゃぶりよりも比較的早い時期にやめるように指導されている。

【目的】

乳幼児健康診査（以下、乳幼児健診）の場における「おしゃぶり」に対する助言指導がいかにあるべきかを知るために、「おしゃぶり」の背景および歯科医が指摘する不正咬合との関連性について検討する。

【方法】

2014年度4月から2015年3月までの1年間にT市で行われた1歳6か月および3歳健診受診児を対象とし、健診時の問診および診察内容を元に調査を行った。有意差検定はFisherの直接確率法を使用した。

【結果】

1歳6か月健診受診者は866名、3歳健診受診者は990名だった。不正咬合の頻度は3歳0ヶ月の時点でおしゃぶりを使用していた群で33.3%、使用していなかった群で10.3%と、3歳0か月の時点で使用していた群で有意（p<0.01）に高かった。不正咬合の頻度において、1歳6か月の時点で「おしゃぶり」を使用していた群と使用していなかった群との間で有意差は認めなかった。また不正咬合の種類においては、開咬が最も多かった。

【考察】

3歳児の「おしゃぶり」は不正咬合に影響を与えるが、1歳6か月児の「おしゃぶり」は影響を与えないことが分かった。乳幼児健診が1歳6か月以降は3歳までないことを考えると、最初の介入の時期としては、1歳6か月健診が妥当である。不正咬合の種類別の頻度は開咬が多く、開咬では構音がうまく行えなくなることから、「おしゃぶり」の使用が言葉の発達に悪影響を及ぼす可能性がある。指しゃぶりに関して、今回、1歳6か月の時点での検討はできなかった。しかし、3歳児の指しゃぶりは不正咬合の危険因子であることを考えると、指しゃぶりに関しても1歳6か月の時点から、介入をしていくことが望ましい。

【結語】

「おしゃぶり」を3歳までにやめることは、不正咬合の予防となるため、1歳6か月健診での適切な指導が望ましい。

Presented by Medical*Online